

皮膚褥瘡外用薬学会

第2回学術集會を名城大学薬学部で開催

NPO法人褥瘡サミット第2回皮膚褥瘡外用薬学会学術集會がこのほど名城大学薬学部において行われた。日本病院薬剤師会、日本薬剤師会、日本老年薬学会、日本在宅薬学会、日本介護福祉士会、愛知県医師会、愛知県看護協会、愛知原理学療法士会など様々な職種が後援した。

皮膚褥瘡外用薬学会は、2014年から一昨年まで「外用療法研究会」の名称で薬剤師のみを対象としてきた。しかし、昨今では外用療法におけるチーム医療の重要性が高まってきており、それに伴い、2018年に多職種を会員とする「皮膚褥瘡外用薬学会」へ組織を変更した。適切な外用薬治療を推し進めていくために必要な知識を学べる貴重な場として、継続して年1回の学術集會を開催してきた。

第2回学術集會は、坪井憲江大会長並びに小池真智子実行委員長（両名共に並木病院薬剤部）のもと「外用療法がチーム医療の未来を変える」をテーマに開催された。過去最多の380名が参加した。当日参加者を対象に実施したアンケート調査（有効回答者数104名）によると、103名（99%）

が学会内容に対して大変良かった・良かったと回答しており、満足度について良好な評価が得られた。

同学会の学術集會の特徴として、受け身で講演を聴くだけではなく、手を動かしたり考えたりする参加者体験型のプログラムが多く行われた。各種講演などが次の通り行われた。

代表講演

古田勝経氏（皮膚褥瘡外用薬学会代表／小林記念病院）が「褥瘡治療は外用薬の使い方が重要」チーム医療で効果的に治す方法／古田メソッド」をテーマに、早く安く治療するポイントについて「褥瘡の治療環境を形成するために、除圧だけでなく、皮膚のたるみやずれの影響をなくすこと、また、適切な湿潤環境とするために外用薬の基剤特性を活かすことが不可欠である。これらをチーム医療で活用すれば治療速度が高まり、医療コストを低減できる可能性がある」と講演した。

特別講演

狭間研至氏（ファルメデイコ㈱／思温病院）が「薬剤師が変われば、在宅褥瘡治療が変わる」をテーマに講演。「調剤だけでなく、薬剤師が患者をみ



特別講演

ることで治療の質が向上する」と薬剤師のポテンシャルを指摘した。その他のプログラム

教育講演として「生体内外の諸因子に影響を受ける皮膚生理機能」大井一弥氏（鈴鹿医療科学大学薬学部）、「在宅でよく見る皮膚疾患／外用療法を中心に」袋秀平氏（ふくる皮膚科クリニック）の2題が行われた。シンポジウム「多職種の視点から皮膚褥瘡外用薬を考える」では5名のシンポジストが発表した。一般演題として口演発表6

題、ポスター発表8題が行われた。ハンズオンセミナーでは、近藤龍雄氏（飯田市立病院）がベッドやクッションを用いて、褥瘡発生や拘縮を予防するポジショニングの方法を、参加者



参加者体験型で

体験型で指導した。また、宇野あゆ美氏（ユニ・チャーム㈱）はおむつと模型を用いて、圧とズレによる肌トラブルが起きにくい装着方法を指導した。外用薬処置実習では、褥瘡モデルを用いて実習を行った。症例検討では、局所療法だけでなく全身状態を考慮してどのようにアプローチすべきか、グループに分かれ2症例を検討した。

次回は下関で開催

第3回皮膚褥瘡外用薬学会学術集會「在宅入院におけるシームレスな外用療法を考える」は川崎美紀大会長（昭和病院薬剤部）並びに坂井美千子実行委員長（㈱薬心堂）のもと、海峡メッセ下関（山口県）において2021年2月14日に開催される。